關西大學々報

大正十一年六月十五日郵便物
昭和十八年五月十日印刷
昭和十八年五月十五日發行

發行人　大阪市北區堂島上三丁目十五番地　野村敬民

印刷所　西大（72）谷口印刷所　大阪市大淀區長柄中通二丁目十二番地

發行所　關西大學出版部　會員振替貯金口座二〇六〇〇〇番

決戰下の大學生活

法文學部長
教授　野村次夫

昨年十月に始まつた昭和十七年度新學年も早や數ヶ月にして終らんとしてゐる。この學年は吾々にとつては相當意義深い年であつた。それは多年の懸案であつた學科課程の改正が實現した年であるからである。時代に即應し種々新たな科目を設け、然かも學生諸君の負擔を輕減する意味で從來の科目の時間數をでき得る限り短縮し、全體として授業時數を五、六時間減じたのである。それに加ふるにいはゆる「學生訓育强化要綱」が明示され、敬禮、頭髮及服裝、出席の勵行等につき要望されるところがあり、學園も一般と戰時下らしい氣分になつた。學生の出席狀態も、特に出席を調査することになつてゐる各科の演習（ゼミナール）や、教練等を通じて觀ると非常に成績がよいようである。勿論これを以て一般を察することはできないであらうが、從來に比し逐次出席がよくなつてゐることは認め得るであらう。報國隊としての協力令による出動、勤勞奉仕、警報下における特設防護團への參加等についても概ね所要數の學生を得てはゐるのであるが、此後は尙一層一人も殘らず參加するよう要望されてゐる。

從來報國團の外にあつた法律、政治、經濟、商業、哲學等の各學會が新たに報國團文化部研究部に所屬するに至つたのもこの年である。その時從來學會としてはなかつた英文學の研究班も設け、結局各科につき研究班が揃つたわけである。この研究班においてはそれぞれ適當の指導教授を得て、教室以外において種々の研究ができることになつてゐる。單なる研究だけでなく、研究發表、討論會等も、學外へ出てすることは回數なり、出席し得る學生數なりが極めて少いであらうが、學内においてなれば十分にできるわけである。統制法その他一般戰時立法の共同研究などやつたらよいと思ふ。その他同じく文化部に屬する語學部において從來は英語班、支那語班があるのみであるが、學生諸君の希望によつては獨、佛、伊、露等の諸語を修めることも不可能ではないと思ふ。一年を通じて一週一回といふやうな方法でなく、夏期休暇中毎日一週間乃至十日位連續講義でマレイ語等をやるのも一つの方法ではないかと同僚と話合つたこともある。次に同じく教養部主催の各種講演會などには、專門以外の種々有益な話を學内で聽かれる機會があるのであるから、海軍軍事講話、文化講義などと共に、必らず出席する事が要望されてゐる。見學部は戰時下でその事業が相當制限を受けてゐると思ふが、學校で認めて行ふ以上は、つとめて參加して、眞の意味での見聞を廣くしてほしい、音樂部、美術部、映畫部等もかやうな時節にどの程度のことができるか、又やつてよいか種々支障が多いと思ふが、學園内で一學期に一回位は音樂會、美術展覽會、映畫會等が代り代り催されると、多少學園生活にうるほひができてよいと思ふ。戰時下にありても、うるほひは必要である。厚生部あたりでも保健衞生のことのみならず、この方面の事業にも着手してゐるが益々擴充してゆき度いものである。これらの各部で如何なる仕事をやつて行つたらよいか、といふことについては學生幹事なり、主務の諸君なりが絕えず學生の總意に注意して希望をもらしてくれると都合がよい。

第二百九號要目

決戰下の大學生活……野村次夫（一）
詩・鷲……藤本浩一（三）
地と政の理合……中村良之助（三）
學内報……（四）
校友欄……（五）
千里山圖書館南方關係書（其の三）……（八）

次に學友會時代の運動競技を引繼いたものとして國防訓練部、體錬部の各部内部がある。これらの各部は一應學友會時代の各部を全部引繼いたものであつて、學部にありては未だ何等の整理にかゝつておらぬ。それは報國團の結成當時は未だ今日程事態はさしせまつておらなかつたし、第一未だ文部省としても從つて又私達としても整理についてのはつきりした方針が立たなかつた爲めである。それは凡ての運動競技はその本來の姿においてはそれ〴〵よい精神なり技術を持つてゐるのであつて、只これを行ふ人なり方法なりによつて弊害も生ずるのではないかといふことが、私達の從來の運動競技に對する根本的の考へ方であつたからである。然るに文部省においても漸く本年四月になつて、いはゆる「戰時學徒體育實施要綱」を發表した、これによつて大體において文部省の體育行政が明瞭になつた。即ち學徒の體育訓練は專ら戰力增强を主眼とし、他方資材の節約、交通機關利用制限等の線に沿ひ、然かも勤勞作業、防空防護訓練の實施等に支障を來してはならぬといふのである。而して文部省の重點をおく種目は戰技訓練（行軍、戰場運動、銃劍道、射擊）と特技訓練（海洋（短艇等）航空、機甲、馬事、自轉車自動車、戰車、自動自轉車）であつて、右の基礎訓練に役立つものとして在來の運動競技二體操（徒手體操が主、陸上運動（步走、障碍走、跳躍、投擲、懸垂、劍道、柔道（空手を含む）相撲、水泳、雪滑（氷滑を含む）球技（蹴球其他適切なるもの）を認めてゐる。從つて此後從來の各部につき若干の整理は免かれぬことゝ思ふ。而してこれらの訓練は從來の如く少數の優秀なる選手を養成することを主眼とせず、一人でも多くの學生諸君に種々の種目の訓練を實施せしむること竝びに從來の如き對外的試合に主眼をおかず、學内における訓練に重きをおくといふことである。その結果、參加校が二道府縣に亘る場合、然らざるも參加の爲め學業を缺く場合は文部省の承認を得なければ大會、試合等を行ひ得ないことになつた。一道府縣内の大會試合等は當該學校長において適宜處理し得ることになつてゐるが、一般に對校試合は旅行等をせずして當該學校内において入場料等を徴收せず、平素の訓練の延長として極めて質實なる形式において實施すべきことが要求されてゐる。然かも參加者は體力章檢定初級以上の合格者でなければならない。

以上の文部省の方針は決戰下の現在として、洵に至當の要求であると思はれる。本學國防訓練部乃至體錬部の事業も漸次この線に沿ふて進まねばならぬと思ふが、これが實現には相當の努力を要する。未だ設備において、又指導者において十分でないところがある。新學年の豫算においてはこれらの點を考慮して國費の優先的充當を期せねばなるまい。又訓練の種目によりては學生諸君を助教助手の任に當らしめることを文部省も認めてゐる。それよりも一層注意するを要するは、各學生をしてそれ〴〵體位に應じた訓練を爲さしむることであつて、過激な運動の爲め反つて身體をそこねては何にもならぬ。これには一、二の學校で行つてゐるが如く、學生を三、四の階級に分け餘り强健ならざる者にはそれに適した運動を行はせることになるであらう。

以上の訓練の中には從來の國防訓練部乃至體錬部中にも含まれておらぬものがあるので、その點では部を擴充しなければならぬかも知れぬが、戰技訓練中、行軍、戰場運動などは、別の方法が考へられぬでもない。修練部においてこれら各個訓練の總決算として從來の集團勤勞、剛健旅行の他に、行軍、宿合等を行ふのも或は戰時下としてふさはしいかとも考へてゐる。

以上は私のほんの思付きであつて、尙此後總務部、各部、各部内部において一層愼重審議の結果、種々の妙案が生まれることを期待して能まない。

（昭十八、五、十四）

鷲

藤本浩一

鷲は峻嶺の斷崖に生れた鬪ひの鳥である
烈風は酷しく彼の産毛に砂礫を叩きつけ
突兀たる岩壁は彼の産壁に反響して
この逞しい鬪志の生誕を祝福した

鷲は艱難に生命を鍛える鬪の鳥である
雷鳴は烈しく彼の翼に雷雨を叩きつけ
荒寥たる山岳は彼の胃袋を距絶して
このたくましい鬪志に堅忍を强制する

鷲は默々として力を養ふ鬪の鳥である
徒に彼は喝はず　徒に彼は飛ばず
しづかに翼をおさめてはその眼爛々として
はるかなる空間に何者かの姿を索めてゐる

鷲、颯爽と一度空に羽搏けば山は震駭し
鷲、猛然と海を襲へば浪天に渦卷く
彼の一擊に敵は忽ち五裂して空しく殘骸
を横たふ

あゝ鷲！　日本の翼　我逞しき鬪の鳥

作者は昭和二年專門部文學科出身
大阪市立西九條青年學校長、詩人
として獨自の境地を開拓し、その
作品はしばしば放送されてゐる。

神武調

地と政の理合

教授　中村良之助

地政か、政治地理か、或は地理政策かと人々は屢々訊ねる。東亞に就いて體制の革まるを呼號しつゝ學勢や思潮の新たなるを知らぬのか、蓋しは知るとも未だ悟道せざるにや。

抑々我が地政の因緣が日本國史と共にはじまると云ふ事は「暫らく」おいて、我が地理が政事や人事と共に考へるべしてふ傳統は、我民族の發展時期に篤實に顯はれる。日清の大捷を祝したも束の間、やがて日露の風雲のただならず、國民は臥薪嘗膽の最中、其間中に求められたる學燈は、實に「政治地理」であつた。

紀元二千五百六十一年春、矢津昌永（當時高師教授早大講師）識す所の著書「政治地理」に依れば「回顧すれば既に十年となりぬ。余は日本帝國政治地理を著はし世に質せしが、其比類多からざる書なりしを以て版を重ぬる事數回」に及び改版をしたる旨を記してゐる。知識を世界に求めて明治維新の完遂の爲に、當時は人事地理、人文地理、或ひは邦制地理が考へられ、政が地と共に新たならんとする理合を今日にも啓示してゐるではないか。今を昭和の維新と云はる。世には、新たなる地理を求むるの切なるか、然らば次に依りて、地理の新たなるを知るべし、

「抑々我帝國統治の基源を原ぬるに、皇祖二柱神、中部なる八大島を發見し給ひしより、既に大八洲の稱呼ありし

――中略――

二柱神の御子天照大神に至り、其の御孫瓊々杵尊をして豐蘆原の瑞穗國を知さしめられたり。――神武天皇に至り國家統一の大志を抱き給ひ、遂に高千穗を出でて東征の途に上られたり、抑々天皇は我國土の趣により水路の便に依るの容易なるべきを明察し給ひ、先づ舟師を日向の海岸より瀨戸内海に

――中略――

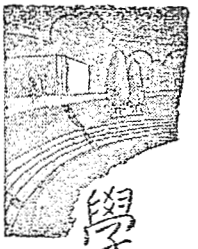
遂に大和に入り創業八年にして中州を平定せられ、大鼎を倭の橿原に定め國家經營の基を開き給へり」と矢津氏は最初に我大政と地理の理合を察記してゐる。

詢に青山四周の大和の地は言字の通りヤマトとして、日本民族永遠の青春を寄ぐにふさわしい地で、更に熊野木の國路の御進軍による大和民族の山と樹に對する錬成によつてこそは今に此の國土を「山紫水明」に世界稀有の環境につくり、啻に瑞穗が保食を意味するに留らぬ眞に青と丹の調合せる豐蘆原を具現せしめた次第である。今にして我民人は此の山嶽と樹林、而して溪川と稻田の耕農の地理を再吟味する要はあらう。地味なき英國の植民者が開きたる米國の平原は、面積と産額の量の膨大さのみが彼等の云ふ大農である。彼等は單に手段と技術の耕作であつて、民族の魂は其地には無い。我は賢くも魂を地に植ゑ、生命を拓かんとして農を求むる。大山戸を大八州に觀じて拓開茲に二千六百餘年、今や大東亞を更にヤマトとして、ヒマラヤ、昆崙にも皇威をひらきつゝある。實に、生成發展の民族と多分の自信をもつ其處に日本地理は日本政治と合理するのである。

然らば日本地理は單に「地表」のものに非らず人性深く勤勞と克己耐忍の生活倫理に介通するものと知れ。

此倭につゞく津の國がある。茅渟の故事にあやかりつゝ國民は只管に海事に勤み、海の内外の使ひ事、舶來せし品草は、務古の水門から堺の浦迄、時世に應じて開かるゝ津々浦々互に場所の興廢はあらうともちぬの海邊は常に大八州の中津の位置を失はず、京師と相應したものである。然るに時人は不覺にも京阪神と三つの行政單位をあはさねばならぬ不都合に至つてゐる。然かず「津の國」てふ古來の地政觀の優秀なるを。中世の武士の封建制をはじむるや、各領主が國の一つや半ばの治領を隔てゝ、それが後に德川の藩制により誤りて固定したるが爲に、遂に古來の國々は政治區劃の性を後の人に失はしめるに至つたものである。

とまれ、此れは津の國として、我民族の海洋性狀に絶對の因緣を遂げたる所である。其處は直ちに紀淡を拯へ南海道こそは民族圖南の海道につゞく。其の西海道は古へより太宰府鎭西の府の置かれし所、其の北するも南するも何れも其の方途の根元は畿内にある。其の先々は大東亞の圏に至るべき拓疆の基地、今樣の「國土計畫」も其意は古い事を知らねばならぬ。



（專門部漢文）　山本　磯治
（豫科專門部漢文）　川村勝太郎
（專門部漢文）　桂　太郎
（專門部統計學・獨語）　高木　秀玄
（豫科獨語）　渡邊　格司
（豫科獨語）　石川　進
植野　郁太

（以上四月一日付）

命研究生

任銃劍道師範（學部・豫科勤務）　谷　金太郎

（四月十五日付）

報國團新幹事決定

專門部第一部報國團

▽總務部—諸田酉（經三）　企畫—古富清（商三）谷口正彰（經三）浦善夫（法二）五十嵐修（經二）　經理—森井彬（商三）鹽見敬一郎（經三）　三村雅利（商二）田中德光（經二）　庶務—石本好男（經三）瀧惠一（法三）　阿部好男（法二）遠藤滲（商二）　報道—三浦一郎（商三）

▽修練部—總務部幹事兼任、横山義弘、倉地勤也、瀧惠一、出田勝重、鹽見敬一郎、石本好男、谷口正彰、古富清、森井彬、友野廣文、中島利夫、浦善夫、阿部好男、二宮正己、田代滿洲男、五十嵐修、田中德光、小崎忠雄、稻田修、三村雅利、遠藤滲、村田治、松村嘉夫、大森重義

▽國防訓練部—出田勝重（經三）　村田治（商二）　航空—河村喜成（法三）　自動車—森內良文（法三）射擊—桑房義（商二）騎道—出田勝重（經三）　銃劍道—天野一夫（商三）　海洋訓練—吉田節次（經三）

▽體練部—倉地勤也（法三）　貝谷央（法二）劍道—吉村賢太郎（商三）　柔道—田中清久（經三）　相撲—猪木八榮（經三）陸上—花房榮次郎（商三）　水泳—倉地勤也（法三）　山岳—柿木弘（經三）

▽教養部—山脇修（經三）　二宮正己（法二）國學研—古川勝次（法三）　東亞研—中馬健三（經三）法研—横山義弘（法三）經研—山脇修（經三）　商研—寺岡敏通（商三）　語學—中川博（經三）　藝能—宮脇章（商三）　雜誌—伊藤輝彦（經三）

▽厚生部—總務部幹事兼任

專門部第二部報國團

▽總務部—田邊周（經三）　企畫—增尾良（經三）藤井龜太郎（法三）　名村嘉夫（商二）小橋友明（經二）　經理—篠木吉堯（經三）　關益雄（商三）　澤田裕之（法二）叶正利（商二）　庶務—多田申嘉（經三）　井上靜明（法三）　土田八朗（法二）小室學（經二）　報道—戶田泰次（商二）

▽修練部—總務部幹事兼任、村上健一、小河進、井上壁明、藤井龜太郎、戶倉敏男、本清政（以上法三）、增尾良、篠木吉堯、伊藤隆夫、油谷耕司、近田精吉、野間昌善（以上經三）、大久保勉男、關益雄、北村要雄、國澤理（以上商三）淺井音吉、瀧川一雄（國三）、神藤清、芳地修（英二）

▽國防訓練部—三宅勇（商三）　射擊—岩元周治　騎道—三宅勇　銃劍道

▽體練部—大久保勉男（商三）　柔道—植村良之助（法二）　山岳—島村三郎（經三）劍道—大久保勉男（商三）

▽教養部—村上健一（法三）　國學研—猪股敏信（商三）　東亞研—中村清（經三）法研—村上健一（法三）　經研—岩城俊彌（經三）　商研—高木清（商三）　國漢研—吉田悠造（國三）　英研—神藤清（英三）藝能—楠本俊治（商三）　雜誌—國澤理（商三）

▽厚生部—總務部幹事兼任

人事異動

依願解職　學生主事補　柴田　定藏

（三月廿五日付）

囑任講師（豫科心理學）　伊藤　碩州
（專門部法學通論）　田畑茂二郎
（專門部工業政策・英語）　松原　藤由
（專門部英語）　山口　辰雄
（專門部倫理・哲學）　横山佐九郎
（專門部倫理・教育學）　橋本　源吉
（專門部英語）　畑　俊雄

がくほう抄

▽三枝樹教授　五月十四、五の二日間京大における諸學振興會教育學特別學會に出席

▽八島教授　五月六、七、八の三日間東京における報國團運營講習會に出席の後、東部諸大學豫科報國團の指導其の他學事に關し視察した。

▽安川教授　五月三日より三日間文部省に開催の諸學振興會國語國文學會出席

校友欄

校友會常任幹事會

、月例の校友會常任幹事會は五月十二日（水）午後六時より天六學舍會議室に開催、理工科系學科設置調査の經過報告、其の他諸般の打合せをなし、偶々來阪の校友會評議員關東州支部幹事平井三朗君の大陸に於ける校友の活動狀況並に母校に對する希望開陳ありて九時散會した。

出席者―岩崎卯一、加藤昌秀、里見復二、春原源太郎、樋口哲四郎、松本茂三郎、三島律夫、森川太郎

堺支部

○時局講演・演藝大會・總會

堺支部にては母校の名聲を全市各層に昂揚すると共に市民の時局認識を深め、且つ適當の慰安を供給せんがため母校々友會本部の協賛と堺市の後援を得、堺市民祭奉賛時局講演・演藝大會を五月二日大濱公會堂に於て開催した。

堺市は毎年五月一・二日　仁德、履仲反正三天皇の御聖德を奉賛し、更に物故先覺者の遺業を追頌する祭典並に各種團體の奉賛行事が執行され、本年は翼壯、産報、青少年團、在鄉軍人會等市役所と密接なる關係を有する公認團體の中にあつて關大校友會堺市部主催の本大會は日の切迫と共に廿三萬市民間に異常の關心を呼び起した。

當日中央會場大濱運動場水族館前に集るもの約一萬の市民は午後一時半大會の開始と共に殆ど大濱公會堂に吸收され、さしも廣い公會堂の階上階下全く超滿員の盛況を呈した。

母校教授中村良之助先生は「堺の歴史と地政を憶ふ」と題し、現下世界情勢に於ける躍進大堺市の重要性を說かれ、聽衆はかくの如き滿員の中にあつて耳を傾け熱心に聽講し、演藝として九里丸の漫談、三木助の落語、文雄、靜代の萬歳、又大喝采を浴び、閉會の辭につぐ萬歳の聲は堂をゆるがした。

かくして大成功裡に閉會後、會場に於て總會を開催し、會員百二十三名一致團結し奉公の誠を誓つた。

當日改選の結果新役員は左の通り。

支部長　楠野泰夫
副支部長　泉谷　與一　井上專一郎
　　堀畑　圩一　中村源次郎
幹事　河崎　隆常　中島富三郎
　　西田　昌弘　太田　周市
　　竹澤喜代治　藤木　操
　　小西　弘容　諏訪　富雄
　　森本　照次　上西　逸太郎、
　　○今井　恒雄　○井上　竹藏
　　○淺香要太郎（○印常任）

石川支部總會

かつて富山、石川、福井の北陸三縣支部聯盟を結成し、母校學長神戸博士、森川、川上兩教授を招きて時局大講演會を開催し、母校關西大學の聲譽を發揚したが、こゝに四月廿五日正午より犀川畔山錦樓において支部總會を開催した。母校より神屋敷學報主任來澤、母校の近狀並に校友會本部と全國支部の活動狀況の報告あり、かつて校友會評議員會に中西老幹事を送つて會員の最大關心事たる理科系學科新設問題につき母校には協議員の調査委員會、校友會の特別委員會にて立案檢討中なる趣、今更調査でもなし、國家の要請に應へて即時設置すべし、吾々數こそ少けれ母校鞭撻の戰士として、北陸三縣支部聯盟の名に於いて建設資金の獻金をなさん、取あへず第一回として出席會員より醵金し、之れを母校理事に送達方を中西幹事に一任した。

かくて支部會員中應召の五勇士に寄せ書と記念撮影をなし、意義ある總會を終了したのは午後三時半であつた。

出席會員――木村佐太郎、松永善光、中西興七、熊野猛、木村仁吉、平井美水、山越外吉、

姫路支部

戰時下增産の大業に邁進しつゝある新進の工業都相生市の一角水月樓本店に於て四月十一日午後六時より春季總會を開催す。來り會する者十四名、國民儀禮の後公務出張中の堀田支部長に代つて吉松副支部長の開會の挨拶、續いて今回愚々神戸より臨席の母校協議員校友會本部常議員角田好太郎氏より母校並に校友會本部の近況に關する詳細な報告あり、次で懇談會に入り自己紹介や懷舊談、更に理工科設置問題に及ぶ、理工科設置は焦眉の急務にして、大東亞共榮圏の指導者として將來の技術的方面を擔つて立つべき有力なる子弟教育機關として、之が實現の具體策を速に講ずべきであるとの母校愛の熱意より迸り出る烈々たる意見あり、九時盛會裡に閉會した。

當日の出席者

來賓　角田好太郎、

會員　田中吉次郎、吉松須賀根、西村新次、小西正夫、山本實、岡野政次、黑田秀雄、上田茂、三浦秀明、瀧北勇夫、室井菊夫、三森五郎、瀧利幸、

朝鮮支部

第二十七回朝鮮神宮參拜―四月四日午前八時朝鮮神宮參集所に集合一同參拜を終つて南山亭で休憩、今日は新顔の天野律司、宮島基河の兩君も見えた、春季總會開催の件は取止めてその代りに五月二日に神宮參拜を擧行すること等を申合せて十時すぎ散會した。

當日の參拜者（順不同）岡本至德、野田博、島田晃、高橋伊平、伊東祐一、秋山雪太、田村格治、宮島基河、曾根三郎、天野律司、在里三芳、小西直意、近藤藏、

秀麗會（關東州支部）

第八十三回例會　三月十八日午後七時より大連神社の聖域に隣る櫻町の大連倶樂部に於て開催す。今回より吾々の例會も面目を一新しやうと云ふことで會場選定の可能な限りに於て、從來の會食を廢しお茶菓子程度にして各自夕食後にお集りを願つた處、校友各位には意外に好評を博し平常の例會よりも多く出席申込者二十一名と云ふ多人數で幹事としては甚だ意を強くした次第である。今夜は特に前回に引き續いて南方戰線歸りの松川君のお土産話を拜聽する豫定であつたが生憎急用の爲め姿を見せられなかつた事は殘念であつた。

扨當夜は新京より遙々と來連中の笹見さん（滿洲電業會社勤務）に目下の重要課題の一つである滿關の電力問題に就て御高説を承つた。同君は昨年完成した鴨綠江の水豐ダムより大連への送電線工事が如何に難工事であつたかを説明せられ之が完成に依る關東州の生産力擴充に一段と生彩を加へた事を想起し感慨新たなるものがある。次で水力及び火力發電の種々な相違點から今後將來に於ける關東州の電力問題に迄言及せられ、眞に興味津々たるものがあつた。

次回からは我々の活躍して居る大陸の玄關たる關東州を中心として其の將來の發展性に就て、お互ひの職域から覗いた構想を校友各位から拜聽する事とした。

因に次回は秀島さんの貿易上より見たる關東州の立場に就てお話しを願ふ事にした。

當日の出席者　室山宇太郎、飯田昇、守谷賢治、平井三郎、高木嘉一郎、秀島全治、笹見幸雄、加來茂彦、岩本壽三郎、山下三郎、北條茂義、高階一三、豐永吉廣、荒川彌一郎、竹若隆三、小川立朝

上海支部

四日十八時より日本倶樂部に於て四月例會を開催す、出席者忽那、福富、富田、藤木、辻野、谷口、椒井、岸本、吉村、大森、話題の中心は一兵隊としてマレー作戰に參加された吉村清一氏に從軍の感想を聽く會であつた。同氏の話は同氏が祖國を後に海上數千浬の征途に就いてから〇日マレーコタバル海岸の一角に一握の砂粒を唯一の掩護物として敵前上陸を敢行してより晝夜の別も無く、敵兵を急進し敵最後の牙城を頼むシンガポールに突入、更に敵を急進南下中不幸敵彈に名譽の戰傷を負ふまでの戰ふ日本兵の精神的肉體的の體驗談である。

我々は同氏の勞苦を具さに承はり心より感謝の誠を捧ぐる次第である。

次に富田氏の內地の諸事情を聞き現地校友も益々奮起せざるを得ない事を強く感じさせられた。

時に九時十分來月の總會に再會を約して散會す。

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年數、算用數字は昭和年數を16前は三月、16後は十二月卒業を示す、又括弧內にある消息は業務動靜

大法

內海　潔（11）西成區天神森一ノ二三（大阪府警察部）

職田佐代治（四）西區江之子島東町官舍

押谷　正男（11）東京市小石川區大塚仲町二三、三喜館內（齋藤塗料製造所東京出張所）

川越　智（6）布施市永和一ノ二二

木村儀三郎（6）兵庫縣川邊郡西谷村境野濱居場一六

九門　土藏（13）大連市上藤町七九ノ九（滿洲塗料統制協會大連支部）

小林　貞次（10）（扇町商業學校）

佐野利三郎（16後）（東京市澁谷區原宿三ノ二八四、大東亞省興亞練成所）

齋藤　駿一（4）神戸市須磨區明神町一ノ六（日本生命神戸支店）

阪井　親（2）（吳市神田町九ノ六、朝日新聞大阪本社吳通信局長）

島田作二郎（17）（臺北郵便局氣付、海南海軍特務部經濟局第六課）

城戸　壽彦（10）（大連市西通二九、大連都市交通會社）

田中　喜一（9）（尾道市三軒家、每日新聞尾道通信部主任）

高井榮吉（9）愛媛縣周桑郡小松町西町

竹島　文季（9）（札幌市苗穗町三六、北海道農公社經理部）

筒井國義（7）（大阪府知事官房議事課）

西井　大二（16後）島根縣安濃郡大田町天神町、西井喜三郎方

西村　幸生（12）大連市榮町二ノ二九、（大連機械製作所）

久井　忠雄（6）（警保局內務事務官より千葉縣官房長に轉任）

細木美代林（10）豐能郡小會根村一七六

二（警部補、此花署警防主任）

前田　秀男（16後）兵庫縣神崎郡中寺村土師八五七

三宅　善孝（13）（吉林市朝陽區大和町大馬路、商工金融合作社吉林支社）

御堂河內四市（5）大正區鶴町三ノ一二一（朝日新聞大阪本社編輯局通信部）

吉村　清一（15）上海白利南路四一號

大政

梅田五一郎（10）（堺實業學校教諭）

川越　茂樹（14）（北京市內二區司法部街三三號、大同炭鑛北京事務所業務科）

笹井　英夫（16前）西成區橘通七ノ五、（東中川國民學校）

中野　文吉（16前）都島區中通五ノ五六、太田方（都島警察署）

西村　和市（7）旭區森小路南三ノ一一二（岩本證券會社）

大文

豐島　孝次（12哲）新京特別市南嶺同仁鄉四〇九號金春館方（滿洲國政府文教部學務司普通教育科中學教育股）

大　經

稲若　博（13）大牟田市大正町四ノ三七（三井鑛山會社三池鑛業所勞務課）
岩本　正（14）新京市義和胡同六〇二、電電社宅四四ノ二（滿洲電々本社故送課）
大塚　正次（4）（靜岡市西深町一五四日本生命靜岡支部）
岩本　如月（14）兵庫縣飾磨郡花田村上原田六九六（大阪專門學校）
小寺善二郎（7）（東京市芝區田町一ノ一二、森永製菓會社乳業部經理課）
潮上　信男（9）（國民更生金庫神戸支所）
寺下　惠雄（16後）福岡市大月田町九八ノ一、永野圓太郎方（不動貯金銀行福岡支店）
毛利常治郎（2）（日本生命高松支部長）
森井　惣吉（5）（日本生命庶務係長）

大　商

川邊鹿之進（4）（北京內六區剪子巷一三號、大阪海上火災北京支店）
山下　重一（2）新京特別市八島通三五ノ四、第壹榮ビル六號（大阪海上火災新京支社）
渡邊順四郎（14）岡山市北方大和町、宮川方（倉敷紡織會社本店）
渡邊　正人（7）東淀川區上新庄町五二（大阪市主事、市民局）

專一法

嶋田　晃（13）京城府蛤町、鐵道局第三益濟寮
濱本　進（9）大連市松風台一四ノ一

專一經

近藤　孝（11）名古屋市千種區田代町大坂五〇
福田　寧（10）（東京市京橋區銀座二ノ二、越後屋ビル、山東鑛業東京事務所）

專一商

今井　清文（16前）奉天省本溪縣南坟村南明臺南明寮（本溪湖煤鐵公司鑛業部事務課）
今井　利雄（14）大連市久方町八Bノ八二、牧田道義方（滿洲重機會社）
小野　規幸（14）（愛知航空會社）
黑田　邦彦（9）（高松市南新町三四、三井生命高松支店長代理）
佐藤　末雄（13）（金剛公立中學校教諭）
田賀　悟（14）東京市日本橋區橋町一〇ノ一一、臺正英方（鐵道軌道統制會）
辻　義人（13）熊本市清水町室園三四ノ四（熊本縣木材會社）
豊永　吉廣（11）大連市黑石礁白波町四七（大連機械製作所）
古本　宗作（9）（新京特別市民豊街八〇四號、國譽印刷紙工會社）

專二法

青柳　秀代（明42）廣島縣佐伯郡小方村小方二五一三、青柳醫院內
淺田　晃（16後）阿倍野區昭和町西二ノ三〇、西雲莊內
石川　友也（14）住吉區北田邊町一五（日本水産大阪營業所）
宇喜多景家（八）（兵庫縣武川地方事務所長）
小川　英三（14）（交野無盡監査役）
岡島　澄男（14）豊中市櫻塚一五〇七ノ一（住友鑛業會社）
沖　正一郎（4）スラバヤ市スケツブマカルス　パルク二一
加藤　紀（八）（廣島瓦斯會社常任監査役）
川端　多一（6）（滿洲國安東省鳳城、鳳城電報電話局長）
河崎　隆常（八）（大阪府貨物自動車運送事業組合企畫課長）
喜多　藤松（13）（奈良縣兵事厚生課）
北田　康民（14）住吉區住吉町二三〇
佐々木豊一（17）（西區明治國民學校）
佐藤　禮三（10）（名古屋市中區榮町五日本生命名古屋支店長）
富川竹治郎（15）（東住吉區稅務課長）
中山　成彦（11）京城府道林町住宅營團第二三九號
永井　量一（九）（東和精機會社）
原口　政明（15）天王寺區細工谷町四七
久田　一榮（14）西宮市常盤町九（愛國生命保險會社）
平井　重信（16前）住吉區粉濱東之町二ノ一
廣田　政之（5）（阿倍野國民職業指導所長）
藤井梅太郎（5）東京市杉並區堀ノ內一ノ一五二（住友生命日本橋支部）
藤城　勳（13）（大阪鐵道局總務部會計課）
曲師　勇三（11）東淀川區下新庄町三二〇
松本　萬（14）旭區森小路町一一四（日本住宅會社）
村上　精三（5）西宮市苦樂園三番町八
矢田　敏夫（14）天王寺區石ケ辻町九七

專二經

泰地　廣次（11）（帝國銀行本町支店）
千足　耕造（14）兵庫縣武庫郡本山村田中高田三二八（神戸銀行西郷支店）
常盤興四郎（12）京都市下京區西九條島町一三壽重工業社員クラブ內（壽重工業會社）
芳賀　敏光（17）（上海博物院路一三一號四一六室、野村殖産貿易會社上海支店）
增田　牧夫（17）（北海道常呂郡留邊蘂町、野村鑛業二股現業所）
松田與三郎（14）住吉區天下茶屋二ノ四六（電氣器具商）

專二商

秋山　雪太（4）京城府三坂通四一ノ一總督府官舍四號

推　薦

高尾　英（尼道市會議員、市會副議長）

改姓名

昭2專　文　石倉勝三郎　内山勝三郎
昭11大　法　河村義則　淺井義則
昭13專二商　横井勦　松本勦

訃　音

松原　和雄（昭15專一經）昨年八月再應召、南方最前線に奮戰中一月十四日壯烈な戰死をされた。遺族南區南綿屋町三七、父松原祐一殿
湯淺　由一（昭6專英）四月十三日逝去遺族神戸市神戸區山本通三ノ四七、湯淺芳松殿

千里山圖書館購入南方關係書（其三）

辭書

滿洲帝國協和會地籍整理局分會編　土地用語字典　昭和14　巖松堂

雜誌・年報・統計書

外務省調査部編　世界經濟年報 第23輯・印度支那（1935年度）　昭和12　外務省
北亜細亜文化研究所編　北亜細亜學報　第1輯　昭和17　南亜細亜文化研究所
國際聯盟編 鈴木政譯　世界原料品・食糧品統計書　昭和17　國際日本協會
國際日本協會編　泰國統計書　昭和17　同會
同編　馬來統計書　昭和17　同會
支那研究會編　支那研究資料・第1・2年　大正6・7　大陸社
商工省貿易局編　日蘭印問題資料（其ノ一）　昭和9　商工省
東亜貿易政策研究會編　大東亜共榮圏綜合貿易年表〔V〕東印度諸島　昭和17　富山房
朝鮮總督府編　朝鮮の人口現象　昭和2　朝鮮總督府
東亜研究所編　支那農業基礎統計資料　昭和15　東亜研究所
南洋團體聯合會編　大南洋年鑑（昭和17年）　昭和17　同會
日本ビルマ協會編　ビルマ統計書　昭和17　國際日本協會
ニュージランド勢國調査統計局編　ニュージランド（統計）年鑑（1941年版）　昭和18　同會
萬國農事協會編 鈴木政譯　大東亜農事統計書　昭和17　同會
商工省貿易局編　暹羅對外貿易統計（1934—36年）　昭和13　商工省
貿易組合中央會編　貿易組合第1卷・第1號　昭和13　同會
蒙古研究所編　蒙古學報　第1・2號　昭和15・16　善隣協會

歷史一般

井出淺龜著　大東亜史物語　昭和17　朝日新聞社
白坂義直著　大南洋史　昭和17　田中誠光堂
李長傳著 今井啓一譯　南洋史入門　昭和17　葦牙書房
Churchward, J. 著 仲木貞一譯　南洋諸島の古代文化　昭和17　岡倉書房
Wooby, L. 著 赤木俊譯　考古學より觀たるアジア　昭和17　白揚社

地理學

楠田鎭雄著　世界地貌學要論　昭和4　古今書院
西村眞次著　大東亜共榮圏　昭和17　博文館

地誌一般

川上瀧彌著　椰子の葉蔭　大正4　六盟館
佐藤弘編　南方共榮圏の全貌　昭和17　旺文社
地人書院編　地理學講座　自第1回至第12回　昭和5—7　地人書館
長谷川與三治著　太平洋を圍繞する諸洲の地理　大正15　博文館
野村得庵外4氏合著　南遊茶話　大正13　大阪國文社
野村德七著　護謨と椰子　大正5　同社
飯本信之 佐藤弘共編　南洋地理大系　ダイヤモンド社
　5. 東印度 I・蘭領印(1)　昭和17
　7. 印度・セイロン島　昭和17
　8. 濠洲・ニュージランド 太平洋諸島　昭和17
村松俊吉著　南方地理風俗（附）印度・濠洲　昭和17　教育社
山田毅一著　南洋大觀　昭和9　平凡社
Hedin, S. A. 著 小野六郎譯　探險家としての余の生涯　昭和17　櫻書店

日本・內地・南洋

伊波普猷著　古琉球　昭和17　青磁社
同・外2名共編　琉球史料叢書　自第1至第5　昭和15・16・17　名取書店
文部省專門學務局編　南洋新占領地視察報告（追錄）　大正6　文部省
山方石之助編　小笠原島志　明治39　東陽堂

支那・滿洲國

足立喜六著　大唐西域記の研究　上卷　昭和17　法藏院
石田喜與司著　蒙古人民共和國　昭和16　中央公論社
五十嵐牧太著　熱河古蹟と西藏藝術　昭和17　洪洋社
大村欣一著　支那政治地理誌・上・下卷　大正2・4　丸善
桑原隲藏著　考史遊記　昭和17　弘文堂
三田史學會編　江南踏查（昭和13年度）　昭和16　同會
支那地理歷史大系刊行會編　支那歷史地理　昭和17　白揚社
西山榮久著　最新支那大地理　大正3　大倉書店
八木奘三郎著　滿洲都城市沿革考　昭和14　滿鐵總裁室弘報課
Anderson, J. G. 著 松崎壽和譯　黃土地帶 北支那の自然科學とその文化　昭和17　座右寶刊行會
Hedin, S. A. 著 隅田久尾譯　ゴビ沙漠橫斷記 瑞支共同科學探險　昭和17　鎌倉書房

印度支那・マライ半島

拓務省拓務局編　佛領印度支那事情概要　昭和16　拓務省
滿鐵東亜經濟調査局編　南洋叢書　愛應書房
　第2卷 佛領印度支那編　昭和17
　第3卷 英領マライ篇　昭和17
　第4卷 シャム篇　昭和13
　第5卷 比律賓篇　昭和17
內藤英雄著　マライの研究　昭和17　愛國新聞社
日本タイ協會編　タイ國通史　昭和17　同會
室賀信夫著　印度支那 佛印・タイ ビルマ・マライ　昭和17　白揚社
Wallace, A. R. 著 內田嘉吉譯　馬來諸島　昭和17　南洋協會

マライ群島

別技篤彥著　蘭領印度　昭和17　白揚社
外務省通商局編　蘭領東印度事情　大正13　外務省
Bulen, L. 著 日本インドネシア協會譯　セレベス　昭和17　帝國產業出版社
Clarke, D. 著 南方調査會譯　蘭印史　昭和17　春陽堂

大洋洲

金平亮三著　ニューギニア探險　昭和17　養賢堂
小林織之助著　南太平洋諸島　昭和17　統正社
西川忠一郎著　最近の濠洲事情　昭和17　三洋堂
宮田峰一著　濠洲聯邦　昭和17　紘文社